

縛られたあひる

小川未明

青空文庫

なが
流れの辺りに、三本のぶなの木が立っていました。冬の間、枝についた枯れ葉を北風にさらさらと鳴らしつづけていました。他の木立はすべて静かな眠りに就いていたのに、このぶなの木だけは、独り唄をうたっていたのです。

ここからは、遠い町の燈火がちらちらと見られました。ちょうど霧のかかった港に集まった船の灯のように、もしくは、地平線近く空にまかれたぬか屋のように、青い色のもあれば、紅い色のもあり、中には真新しい緑色のもありました。そして、その一つ一つに、いろいろの生活があるごとく思われました。木たちには、人間の生活というものがよく理解されていかなかったようです。人間は、ただわがままで、無考えで、快樂を追っているとしか思われませんでした。まったく生き物の悲しみというものを知らないもののごとくにしか考えられませんでした。だから、彼らは、かってに林を切り倒し、土地を掘り返して、自分たちの生活についてはすこしの同情ももっていないもののように見えたのです。

三本の木は、たがいに頭を寄せ合せて、かなたの町の方を見ていました。天気の良い日には、白い煙や、黒い煙が立ち上っていました。もし木立は、その煙が、自分たちの屍を

焚く煙であつたと知つたら、どんなに驚いたことでしょう。やがて、夕日が沈んで暗くなると、燈火がちらちらと閃きはじめました。ところが、その群がった火の中から、飛び出したように、ぽつ、ぽつと、町をはなれて、幾つかずつ火が寂しい野原の一方に散つていくのでした。ある夜のこと、すぐ近くにみずみずしい冴えた魔物の目のような燈火がついたのです。これを見た、一本の木は、

「おや、あすこへも、やつてきたぞ！」といいました。

「なるほど、いつここへくるかもしれない。」と、他の一本の木は、不安そうに、答えました。

三本の木は、その夜、北風に声を合わせて、いつになく悲しい唄をうたつたのであります。

明るる日、朝日の影が、下の流れの上に射したとき、小さな魚たちは、もうじき春がくるのを喜ぶように、銀色の腹を見せながら水の中で踊つたのでした。そして、のねずみは、穴の入り口で、目をこすりながら、

「昨夜は、ぶなの木さんが、悲しい歌をうたっていたが、人間どもがこのあたりをうろついて、木を切る話でもしたのかな。いやこのごろの世間の不安ってありやしない。いつ

この川辺かわべのおれたちの巢すも掘り返かえされてしまふかわかつたものでない。危あぶないとなつたら、どこへか引ひつ越こしをしなけりやならん。」と、ひとり言ごことをしていました。

午後ごごでした。なんだか、急に頭あたまの上うへが騒さわ々ざうしいので、のねずみは目めをさましました。

そこで、穴あなの中なかから出でて、のいばらや、藤ふじづるの下したをくぐりぬけて、ぶなの木のところまできてみると、いつ造つくつたか、そこには、みすばらしい犬いぬでも入りそうな小舎こやができていました。屋根やねには、さびたブリキ板いたを載のせ、周しゅう圍いは、破やぶれた板いたが立たてかけてありました。のねずみはのぞくと、天てん井じょうから、ぼろきれが釣つるしてあり、バケツには、川かわ水みずが汲くんであつて、頭とう髪はつの伸のびた父ちち親おやらしい乞食こじきが、曲まがった指頭ゆびさきで、もらつてきた錢ぜにを数かぞえていました。そのそばに、十とおばかりの男おとこの子こが、口くちをもぐもぐさせて、なにか食たべているようすでした。これを見たみたのねずみは、板いたのすきまへ頭あたまを突つつ込んだままだうしようかと、しばらくためらつていましたが、

「ぶなの木きさんも、こんな人にんげん間まどもが下したに住すんではさぞ困こまることだろう。しかし、町まちの方ほうから、子供こどもたちが釣つりにやつてこなくなるだろうから、魚さかなたちには、都合つごうがいいかもしれない。」

そんなことを思おもいながら、小舎こやの中なかへは遠慮えんりよして、圃たんぼの方ほうへ走はしつてゆきました。

はたして、乞食の親子は、ぶなの木の根もとで火を焚きました。青い煙が、幹を伝い、小枝を分けて、冴えた、よくふき清めたガラス張りのような空へ上つてゆきました。このごろ、ぶなの木は、春の近づいたせいかわ、空を見ると、去年の夏、飛んできたかわらわのことを思い出すのでした。かわらひわは、毎日のように、どこから飛んできて、枝に止まって、いい声でさえずりをきかせたり、また、遠い旅の話などをきかせてくれたのでした。そして、別れる時分に、さも名残惜しそうにして、

「また、来年の若葉のころには、きつときますから、どうぞ、みなさんお達者でいてください。」といったのでありました。

三本のぶなの木は、そのかわらひわのいったことを思い出すにつけ、こんな乞食が、ここへやってきたのでは、たとえ自分たちが、無事でいても、かわらひわは、おそらく、二度とここへはきて止まることもあるまいと考えたのでありました。それは、なんという情けない、また悲しいことだったでしょう。日が沈んでから、その日も募り出した、北風に、木は、昨日にもまして悲しい声で唄をうたつたのであります。

二、三日後の、暮れ方のことでした。だいぶ暖かになったので、水の中の魚が、しきりと輪を描いて泳いでいました。このとき、乞食の子は、町の方から、一羽のあひるを抱い

て帰つてきました。それより、一足先に小舎へもどつていた父親は、それを見て、
 「どこでさらつてきた？」と、たずねました。

「犬かくわえてきたのを追い払つて、捕らえてきたのだよ、どこにも傷がついていないよ
 うだ。」と、子供は、あひるを大事そうに両腕の間に入れて、いつまでも放そうとは
 しませんでした。

「焼いて、食べたら、うまかろう。」と、父親は、じつと、ふるえている羽の紫色
 をした鳥を見つめました。

「俺はいやだ、殺すなんて。」と、子供は、白目を出して、父親の顔をにらみました。
 「どうする気だ？」と、父親は、そつけなく問いました。

「おら、飼つておくのだ。」

「ばかめ、そんなもの飼つておいてみる、おまえが盗んできたことになるぞ。」

子供は、考えていましたが、

「明日殺そうよ。今夜だけ、川の中へ、一晚、足を縛つて放しておくから、それならい
 いだろう?」

「かつてにしろよ。」

父親は、無理に今夜あひるを殺すとはいいませんでした。せめて、一晩は、子供の自由にさせておいてやろうと思ひました。

「しつかり足を縛っておくだぞ、さあ、この縄でな。」といつて、父親は、手ごろなじようぶそうな縄を取り出して、子供の足もとへ投げました。

子供は、だまつて、縄を拾つて、あひるの足を結んでいました。もう水の上は、ほの白く夜の空の色を映しているだけで、水ぎわに生えているやぶの姿がわからないほど、暗くなつていました。子供は、しばらく、その暗を透かして、水の面がさざなみをたて、あちらこちら泳いでいる、あひるのようすをながめていましたが、手に握つている、縄の端をいばらの木の根につなぐと、さも満足そうに、小舎の中へもどっていききました。それからのこと、暗がり泳いでいたあひるは、足についた縄の重みで、身動きができなくなつたのか、岸へ上がつて、やぶ蔭にうずくまつてしまいました。

今夜も、ぶなの木は、悲しい唄をうたいつづけました。たぶん、あひるは、何事も夢のよう、意外であつた、この一日のでき事を思い出していたのでしよう、目をぱちくりさして、太いくちばしで、傷のついてゐるらしい、翼の下あたりをなめながら、気にしてゐました。そのうちに、つい自分が、どこにどうしてゐるといふことも忘れて、あの居

心地ごこちのよかつた古巢ふるすが、この付近ふきんにでもあると思つたのか、急に恋きゆうこいしくなつて探さがしはじめました。しかし、それは、ますます彼の体かれからだを窮地きゆうちに陥おとしれるものだという事に氣きづかなかつたのです。

穴あなの中から、頭あたまを出だして、いっさいを知しりつくしたのねずみは、あひるが、不格好ぶかつこうなようすで、あわてるのを見みて、はじめはにこらしい奴やつだ、いいきみだというくらいに思おもつたのが、だんだん氣きの毒どくになりました。それには、前まえにこんなことがあつたから——いつかこの流れながへ下おりた白鳥はくちようが、旅たびのおもしろい話はなしをきかしてやるからと、たくさんの魚さかなたちを集あつめておいて、ふいに、かわいらしい小ぶなを三さんびきも食たべて、どこかへ逃にげていつてしまつたことを知しっていたからです。けれど、この愚おろかなあひるには、そんな芸当げいどうは、どう見みてもできそうはありませんでした。それどころか、自分じぶんでぐるぐると繩なわをなにかの枝えだに巻まきつけて、苦くるしまぎれに、ウエー、ウエーと悲鳴ひめいを上げていたのでした。ちようどその声こえは、ぶなの木きがざわざわと体からだを揺ゆすつて歌うたうのに、調子ちようしを合あわせて、頓とんきよ狂う拍子ひようしでも取るようにきかれたのでした。

りこうなのねずみは、この風かぜのうちに、いつもにない不安ふあんを感じかんじたのです。昼間ひるま、もうだいぶ青々あおあおと伸のびた麦むぎ圃ばたけを通とおつている時分じぶんにも、ただならぬ風かぜのけはいを予知よちした

のであるが、日が暮れてから、いつそうその不安は濃くなってきたのでした。

「この美しい、すみよかつた場所がこんなになつてしまった。このとおりあひるは縛られて明日の命がわからないし、ぶなの木は、根本が焦がされている。そして、川の魚も、私たちも、安心してはいられない。すべてのものが息詰まつているのだ。なにか思いがけないことでも起こらなければ、もう二度と昔のように、平和な楽しい太陽の光は見られないだろう……。」

穴の入り口から、夜の空を仰いで、こんなことを考え込んでいたのねずみの姿も、そのうち、いつしか消えてしまいました。

真夜中ごろ、子供は、あらしの叫びで目をさましたのです。小舎が、ぐらぐらと動いて、ブリキのはがれる音がしていました。

「たいへんな風だ。」

「いつでも逃げる用意をしていれよ。バケツとふろしき包みを忘れんな。」と、父親がいました。

子供は、外へ飛び出しました。空は、気味悪いほの白きで、ぶなの木が、腰を折れそうに曲げて、風の襲うたびにくびを垂れるのが見られました。

「父ちゃん、あちらの空が、火事のように明るいわ。」と、子供は、外から叫びました。
 「大風のときは、そういうもんだ。このあらしが過ぎれば暖かになるぞ。」

ちようどこのとき、その声を打ち消して、どつとたたきつけるごとく吹きつけた風に、
 小舎は、めりめりとこわれて、ブリキ板がどこかへ飛んでしまつて、なにかにぶつかった
 音がしました。

「雨が降つてきた！」と、子供が、大声で告げました。

「さあ、いつものところへ逃げろよ。」と、父親はそこらにあつたものをひつつかむよ
 うにして、闇の中へ駆け出しました。子供は、川ぶちまで飛んでくると、あひるは、いま
 にもものをくくられて死にそうな悲しい鳴き声をあげていました。子供は、刃先の鋭い小
 刀で、足を縛つた繩を切りました。そして、そのままあひるを放して、バケツとふろし
 き包みを下げて、父親の後を追いかけてきました。

雨と風と雷の、ものすごい一夜でした。その夜が明けはなれたときに、流れの水は満
 々として、岸を浸して、春の日の光を受けて金色に輝いていました。また、ぶなの木
 は、古い枯れ葉をことごとく振り落として、その後から、新しい緑色の芽を萌してい
 ました。乞食は、ふたたびその木の下に寄りつかず、どこへいったやら、あひるの影も見

えなかつたのであります。いづれ彼らの消息は、りこうな、敏捷びんしょうなのねずみによつて、探ね出たずされて、ぶなの木きや魚さかなたちにもわかることでありましょう。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

初出：「児童文学」

1936（昭和11）年3月

※表題は底本では、「縛《しば》られたあひる」となっています。

※初出時の表題は「縛られた家鴨」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

縛られたあひる

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>